

ラオスの子ども通信 18号

(2000年10月発行)



留学生も楽しんで「いらっしゃーい」。(左) / ラオス大使館でみんなで春巻をまく。(右)



夏の麻布、熱気のラオス屋台「国際バザール」8月18日(金)～20日(日)

昨年に続き、ラオス大使館との協力で東京港区の麻布十番納涼祭り「国際バザール」に出店しました。私たちの「ラオス料理屋台」には、前日の準備を含めた4日間で、のべ約150人もの方が参加。そこには、もうひとつの祭り、私たちの祭りがありました。日本全国から駆けつけたラオス人留学生、大使館のみなさん、ボランティアの活躍で、3日間で何と2,000杯分のミーカティ(ココナツ風味の辛い汁ピーフン)や4,500本の春巻などを販売。お味も「どこのレストラン？」と聞かれるほど大好評で、約100万円(!)の収益となりました。これは活動資金として大切に使用させていただきます。作った人、売った人、食べてくれた人、みなさん、ありがとうございました。

<参加者の感想から>

●バリマさん

私たちのお店の前を通る人が「おいしそう!」「食べてみたいっ!」と言ってくれるだけでも嬉しかったです。そしてお客さんが「これ、おいしい〜!」

と喜んで食べてくれて、その笑顔を見ると、みんなの一日の疲れがどこかに飛んでしまったのです。ラオス料理を通じてラオスのことに興味をもっていただけだったらいいなと思いました。

●モイさん

あのお金はすごいですね。もう、あれを見たら今年少なくとも3日間いいことしたなと自分で感動しちゃった。ラオス人として何かラオス人のためにできることがあれば自分もやりたいと思いました。そして、ASPBと出会って、参加できてとても嬉しいです。できればまた参加したい。

●工藤政則さん

会の活動に参加するようになって2年目。今回はボランティア連絡係を担当しました。慣れないことで力不足の面が多々ありましたが、何よりも多くのラオス人留学生の方々と深く交流できたことが嬉しかったですし、役に立てたという充実感を味わえたことが良かったです。来年は、より多くの方々と感動できることを楽しみにしています。

民話絵本コンクール、応募作品が集まりました。

前号でもお知らせした、ASPBがラオスで開催した「民話絵本コンクール」。「あなたの村の民話を絵本にしませんか」と呼びかけ、3月にコンクール参加希望者のための絵本づくりセミナーをヴィエンチャンで開催。7月に応募を締め切り、各地から28作品が寄せられました。現在、ラオスと日本とで、作家、編集者の皆さんとともに審査中。出版に結び付けていきます。応募作品から一話を紹介します。

天のスズメ

昔、山の奥、仙人の長く伸びたヒゲを巣にしてスズメの家族が暮らしていました。ある日の夕方、スズメの夫がえさを探しに行ったのですが、なかなか見つかりません。ハスの花の中にまで入って探しました。やがて夕日が沈むと花が閉じ、鳥は閉じ込められてしまい、そこで一晩過ごしました。

巣に帰ると妻スズメが「どこかで浮気していたの」と怒りました。夫は「それでは私が仙人と同じ体をしているということか」と言い返した。それを聞いた仙人は怒り、巣になっているひげを切って山奥に捨てました。

乾季になり、山火事が起こり、火が巣まで迫ってきました。子スズメはまだ飛べず、親鳥が運ぶには大きくなっていました。鳥たちはいっしょに死ぬ覚悟を決めました。妻は、「もし夫が1人で逃げてしまったら、私が生まれ変わったとき、男とは一切口をきかない」と心に決めました。煙が入ってくると夫は我慢ができず、飛び出しました。振り返ると巣は燃えていて、夫は見るのもつらく、自ら命を絶ちました。時が流れました。チャンパナーコーンの町で、王様がお告げを出しました。姫が生まれてから一度も男と口をきかない。誰かしゃべらせることのできる人はいないか。話をさせることができれば結婚させ、町を譲る、と。しかし誰も成功しません。

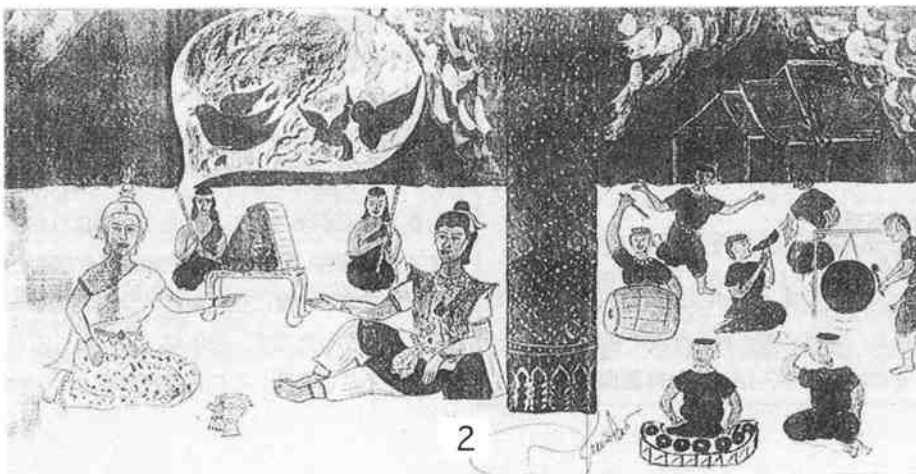
うわさは広がり、タオウオラチという男の耳にも入りました。タオウオラチは仙人の下で修業を積み、空を飛ぶ術と人をしゃべらせる術を身につけました。そして男は町に着くと、まず姫の家の階段に彫られた龍にしゃべらせました。それから、ドア、ゴザ、布団に昔の話を、こんな風にさせました。

「煙が入ってきて妻が逃げた。そして、夫は死に、妻も死んだ」

それを聞いた姫は、「ちがうでしょ。本当は夫が逃げたのよ」と、思わず口をきいてしまいました。

周りの女官も王様も大喜びし、姫と男は結婚しました。男は自分の村で暮らそうとし、つれて帰る妻を指輪に化けさせ、空を飛んで帰途に着きました。空を飛んでいると、鬼が現れ、妻をさらおうとしました。鬼は山の形になったり、牙をむいたり、頭をいくつにもして男をこわがらせようとしてきました。ところが男は怖がることなく、弓で鬼の親分の首を射止め、退治しました。鬼の家来たちは「鬼の国の王様になってください」と言いました。男は「鬼の国はいらない。他の男を捜しなさい」と言うと、鬼たちは「ならば家来にして連れて行ってください」と、姿を人間に変えてついていきました。そして夫婦は幸せに暮らしました。

(作・画：アノラートさん)



みんな、本が大好き。

ASPBや小学校の図書室を利用している子どもたち、先生の声を集めました。



12歳の時からASPBの図書室のメンバーです。たくさん本があるので選んで読むことができます。家にも借りて帰って、お母さんや妹も読みます。おばあちゃんに民話を読んであげると、とても喜ばれます。(マライトーンさん・18歳/ヴィエンチャン)

本はいろいろな知識を教えてください。暇があると図書館に行き、算数やいろいろな勉強をします。成績も上がりました。(ソニワンさん・9歳/ヴィエンチャン)

小説を読むと、自分がすっかり主人公になりきって、喜んだり、悲しんだりしてしまいます。将来は作家になるのが夢です。(キンナリーさん/サイヤブリ)

本を毎日読むと字を忘れません。本を読んで賢くなれたと思います。英語もできるようになりました。(ラッタヴォンさん・11歳/ルアンパバン)

マナーやいいこと悪いことが、本を読んで分かるようになりました。勉強も好きになり、家の手伝いもちゃんとして、先生にもお母さんにもほめられます。(ケオモグターさん・12歳/ヴィエンチャン)



自分の学校に図書箱が来るとは夢にも思いませんでした。こんなにたくさん本を自分が生きている間に読めるとは。子どもたちには毎日本を読むようにすすめています。

親から本をもらって村の人たちにも読んでもらえるようにしていきたいと思っています。(センケオ先生・小学校教員/ヴィエンチャン)

(イラストは民話絵本コンクール応募作品から。上はブンルアさん。下はヴァンマイさん。)

都会のはなし

--最近ヴィエンチャン事情--

赤井 朱子

学校図書室のオープンでのこと

3つの小学校の図書室のオープンに立ち会った。どこの学校でも、図書を整理したり設置する作業を高学年の子どもたちが手伝ってくれていた。

そしてどの学校でも、手伝っているはずの子どもたちが、だんだん我慢できなくなって、本を開いて読みはじめてしまう、という光景にでくわした。誰かひとりが読みはじめると、次から次へと手が延びてきて、いつの間にか作業は中断してしまっていた。作業がおくってしまうのだけれど、しかし、本を食い入るように読む姿を見てしまったら、そんな子どもたちを制止する気にはなれなかった。

おそらく初めて手にするであろう教科書以外の本を音読する子どもたちの声が、新しい図書室に響き渡っていた。

その時、私はあることに気がついた。以前はこんな光景を、ヴィエンチャン事務所の図書室でもたくさん見かけていた。本を読むことにまだ慣れない子どもたちは、本を開くと、一つ一つの文字を指差しながら、声を出して読んでゆく。声に出して読み耳から聞くことで、よりよく理解することができるのだろう。小学校の高学年ぐらいの子どもでも、そのようにして読む姿がよく見られた。しかし、最近、事務所の図書室で、高学年の子どもが音読する姿はあまり見かけない。声を出さず、静かに目で追いながら読むようになってきているのだ。むろん、音読しないように指導しているわけでは決してない。たくさん読むうちに黙読するようになってきたのだろう。

現地事務所で図書室を開いて約7年。図書室も本もラオスで根を張りつつあるようだ。

市場でのこと

帰国直前のある日、日本でいつもイベントを手



伝って下さるボランティアの方たちに、小さなお土産を買おうと、「タラート サオ」という市場へ行った。市場といっても、生鮮食料品はなく観光客向けの商品も多いショッピングセンターのようなところである。

手ごろな小物を見つけ、値段交渉の末、購入を決めると、同行してくれたヴィエンチャン事務所スタッフのポーケオが売り手のおばさんに聞いた。

「領収書ありますか？」

おばさんは「あるよ」というと、ごそごそと領収書の束を取り出し、そのままポーケオに差し出した。

「私書けないから書いて」と言う。

書式がわからないのかと思い「書き方教えるから」とポーケオが言うと、

「でも、書けないからあなたが書いて」と言う。

仕方なく内容を口頭で確認しながらポーケオが記入し、「最後のところにサインを書いてくれる？」とおばさんに渡すと、とてもゆっくりとゆっくりと、ひと文字ひと文字確認しながら、自分の名前を書いてくれた。

他の店でも、領収書の綴りは出てくるものの、記入は10歳ぐらいの娘がするという場合も何度かあった。

外国人観光客もたくさんやってくる大きな市場で、商売をしている女性たちの中でも、文字を自

由に読み書きできない人が少なくないことに気がつかされた出来事であった。

ヴィエンチャン流休日の過ごし方

久しぶりに休みとなった日曜日、スタッフのソンベットからピクニック(?)に誘われた。「いつもヴィエンチャンの街中ばかりで仕事をしているから、平井さんと赤井さんにラオスのきれいな自然のあるところを見せてあげたいのよ」というソンベット。東京で仕事をするに比べたら、ヴィエンチャンで仕事をするのも充分自然に触れる機会があると思っていたのだが、せっかくの好意なので行くことにした。

国立図書館のスタッフ、会スタッフのポーケオとカオ、そしてそれぞれの子どもたちが参加して、車2台に乗り込み出発。「どこに行くの?」と聞くと「滝があるところ。水遊びもできて気持ちいいよ」とのこと。

車を30分ほど走らせるともう到着した。「滝」と聞いてびっくり。20メートルほどの幅の川に、高さが1.5メートルぐらいの小さな堰がそこにあった。水量も多くななく、堰の上でも下でも、沢山のラオス人が水遊びをしていた。水着を着ている人などほとんどおらず、皆洋服のまま遊び泳

いでいた。遊びの間には、各々持ってきた食べ物を川の周りで広げて、仲間たちと食事。周辺には食堂もあるのだが、殆どの人は自分達で食料を持ってきていた。中には、火をおこして煮炊きをしている人たちもいた。

親戚の車1台に人も食料も乗せられるだけ乗せてやってくる。市内からも近く、食べ物を自分達で持ってくれば費用もほとんどかからないので、庶民の手頃な休日の過ごし方のようだ。それまで、県外に出かけたことがない、当会のスタッフのカオでさえも、その場所にくるのは3、4回目だとのこと。少しずつではあるが、ヴィエンチャンの人々も休日に遊ぶ余裕もでてきているようだ。

さて、子どもたちが水遊びをしている時、ソンベットとこんな話をした。「娘は、水遊びはそんなに嫌いじゃないんだけど、普段のアプナム(水浴び)が大嫌いで毎日大変」と私が言うと、ソンベットは「ラオスでは、1日に3回も4回も水浴びをしていて、子どもというものは水浴びが大好き。でも、もしも水が嫌いな子がいたら『ネコのようだ』というのよ。ほら、ネコは水が嫌いだしよ。あと、何日も雨が降らずに困った時、ネコに水をかけて雨が降るようにお祈りするという風習もあるのよ」ネコも災難である。

* * * * *

田舎のはなし

--最近ヴィエンチャンの外事情--

野田 幸枝

夏休みに1ヶ月間ラオスを旅しました。今回は民族間の言葉の違いに触れたことが、教育・識字の普及についての問題意識につながりました。違うのは言葉だけではありません。今回様々な民族と触れ合う中で各民族が独自の気質を持っていることに気が付きました。

ルアンパバンで一緒に過ごしたモンの子達は優しくてみんな仲良しです。モンの子達の描く絵はとともきれいです。モンやラオ、インドの民族衣装を着た女の人の絵をかわいい高い声で鼻歌を歌いながら楽しそうに描きます。モンの子達の豊かな色彩感覚や丁寧な線の描き方は緻密な刺繍を伝統とするモン族の文化の中で自然と育まれたもの

だと思うと、モンの伝統文化がいつまでも受け継がれて欲しいと切望せざるを得ません。

仲良くなったモンの子達の中で一番年上のマイと言う子が私は大好きです。マイは私にモンの刺繍を教えてくれました。マイの家を訪ねた時マイは私に民族衣装を着て撮った写真を見せてくれました。その民族衣装は普段私が見かけるものよりも凝っていて様々なデザインがあり、何か特別なときに着て撮ったのだと思います。言葉が解ればそのことを聞いたのにとと思うと悔しいです。

ところで、ルアンパバンのモンの子達はモンの民族衣装を着ていないのですが、それは何故なのかにも興味があります。次に行くときはもっと言

葉を覚えて行かなくてはなりません。それと、マイが字の読み書きが出来ないのがとても気になったのでお世話になったマイのために、マイが字を覚えられるような手助けを何か出来ないかと考え中です。

ルアンパバンの次に目指したムアンシンという町は、民族目当ての観光客が大勢集まってくる所です。ムアンシンで一番目立つ民族は何と言ってアカとタイダムでしょう。

アカの民族衣装はとてもかわいく一目見て好きになりました。糸巻きを膝で蹴り、手に持った綿から糸を紡ぎだして糸巻きに巻き付けていく技にも驚きです。正直な話、ムアンシンに来て2、3日経った時アカに対して、“ちょっと恐いおばちゃん達”というイメージを抱いていました。何故なら売り方がしつこくて、見た目がド派手だし、人が食べ物を持っていると欲しがります。そして何と言っても非合法のものを一応こっそり(?)売っているのです。ムアンシンのおばちゃん達は観光客に強烈な印象を与えます。しかし、ムアンシンに長く滞在する中でアカに対する私のイメージは変わりました。村で民族衣装を作る女の子達や良い香りのする白い花を摘んで耳に飾って出かけていくアカの人達に出会って、私はアカのおしゃれ心に魅了されてしまったのです。印象深かったのは移動中に会った子ども連れのアカの女性です。彼女は純粋な瞳で私達観光客を見つめて近づいて来ました。私がラオ語で話しかけても反応がなかったので少しだけ知っているアカの言葉で挨拶をし年齢を尋ねると30歳とのこと。子どもは9歳の男の子が1人だけで父親はいないのだと教えてくれました。

アカの人々は一体どのような民族なのか不思議

でなりません。彼等の持つ価値観や宗教についても興味があります。彼等の精神世界を知ることで何か開発のヒントが得られるような気がします。

タイダムの村では家々で機織りをしている様子を見ることが出来ます。ムアンシンの町でタイダムが観光客に売っている物は主に布です。どの人も同じ様な布を売っているのですが、糸の質が違ったり、古かったり、人によって丁寧な物とそうでない物があるのでじっくり見ると楽しいです。タイダムは自分たちの布や民族衣装の他に、何故かモンの刺繍やアカのアクセサリ、ヤオの民族衣装や中国製のプレスレットも売っていてびっくりです。どうやらタイダムはムアンシンで一番商売熱心なようです。観光客が来ると急いで行き、売り終わると素早く去ります。

今回の旅行では、民族独自の性格がどうやって作成されたのか不思議に思いました。時の流れと共に人々の生活も変化します。観光客が来る所では現金収入を得るために人々はお土産を売るようになり、市場で既製服を買って着るのが一般的になっていく様子に触れると、人間の文化というものがとても儂いもののように感じます。

そんなことを思いつつも私は、山裾から霧が沸きだし、川が村々を流れ、鮮やかな色の蝶々が飛び交うそんな所で、釣りをしたり星を眺めたりしてしながら、のんびりとまるで夢の中にいるような日々を送っていました。

(野田幸枝さんは学生ボランティアです。来る10月7、8日の日比谷公園の国際協カフェスティバルでASPBの出店の企画を担当しています。どうぞおこし下さい。)



10年目の読書推進運動 — 移動図書館・図書袋の評価会議に向けて

野口 朝夫

木箱や袋に本を詰めて小学校に配付する「移動図書館・図書袋」プロジェクト。ラオス政府が読書推進運動の一環として1990年に開始し、「2000年までに全国のすべての小学校に配付」を目標に、ユニセフ、SVA、ASPBなどの協力の下に進めてきた国家事業です。区切りの年にあたる今年、ASPBは、その評価会議開催を呼びかけ、来る12月、情報文化省、教育省、国立図書館、各県教育委員会担当者、NGOなど100名程度が集まってヴィエンチャンで行われることになりました。

* * *

ASPBがこのプロジェクトに参加して今年で8年。昨年末までに図書館・図書袋を届けたのは約1,200校。箱・袋の製作、中に入れる図書の購入、配付、セミナー開催など直接的な現地経費は約2,300万円にのぼっています。

1990年当時、6,340校だったラオスの小学校数は、今や8,140校と大幅に増えました。配付が終了したのは約3,900校。「すべての小学校に」という目標は達成どころか、むしろ遠のきました。プロジェクト推進主体のラオス国立図書館は、今後3～5年のプロジェクト延期を決め、各NGOに支援の継続を求めています。

それに対して会は、「全ての小学校への配付」という数値目標の意味を問い、関係者が一堂に会して話し合うことを提案。評価会議の開催を求めたのです。その調整のための準備会を、この7月に開きました。

* * *

準備会では、図書館・図書袋プロジェクトの「成果」の設定が配付校の「数」以外は明確でない

点、配付地域や配付校の選択などの方針が不明確な点、図書館の利用がカリキュラムに正規に組み込まれていない点などについて、担当者との質疑応答、意見交換を積極的に行いました。

私たちは、図書館・図書袋が「誰にとって、どのように、どこまで」役立っているのか、読書推進運動を進める上で現在の方法が最も有効なのか、ほかにより良いやり方があるのかなどを検討する考えで臨みました。一方、政府側は、学校でドロップアウトする子どもが減ってきている、小学生がスラスラと本を読めるようになったなど、「十分役立ってきた」という前提に立って話を進めようと思いました。また政府が責任を持つ読書推進運動の今後の展望について、政府機関同士で共通のイメージがないことが明らかになりました。

そこで、SVAとASPBでは、評価会議を実りあるものとするため、12月までに「移動図書館図書袋」活動について全国3地域で共同調査を行うこととし、例えば「配付前後で子どもたちにどのような変化があったか」など成果と問題点を少しでも明らかにしていくことにしました。

プロジェクトの質を高めるためには、配付校の拡大にとらわれるよりも、配付された本が子どもたちにより有効に利用されるように働きかける（子どもたちの読書に対する意欲を向上させる）、またラオス社会が自立的に読書推進活動を継続発展させることが出来るようになるプロジェクトへと方向を転換することが必要です。現地調査の結果を踏まえ、どう転換を具体化させていくのか。より多様で柔軟な方法を模索していきたいと考えています。

ASPBの図書館・図書袋の配布実績

	92年	93年	94年	95年	96年	97年	98年	99年	合計
図書館配付 学校数	200	110	100	50	50	65	100	110	785
図書袋配付 学校数	—	10	20	100	100	60	60	65	415
箱・袋 経費 (千円)	4255	1578	1401	556	3475	2279	4493	4993	23034
図書室 開設数	—	—	—	5	14	6	8	9	42

CCCのあり方を探る ― 専門家派遣報告

6月22日～7月30日、専門家を派遣し、子ども文化センター(CCC)で行われている図画工作教室について、そのあり方を探るための調査を実施しました。私たちは、CCCで図画工作を通じた子どもたちの自己表現に関心を払っていますが、その理念をCCCの講師と十分に共有するには至っていないのが現状です。それはなし得るのか、できるとすれば、打つべき手は講師の研修なのか、CCCの運営のあり方なのかという点に問題意識がありました。

派遣した専門家は、日本での中学校の美術教員、中米コスタリカでの青年海外協力隊員(美術教育)という経験をもつ平井尚美さん。短い期間でしたが、ヴィエンチャン、ポリカムサイ、ルアンパバンの各CCCをまわり、現地スタッフとともに様々な実践活動も行っていただきました。学校の先生を集めたセミナーも実施。参加者は技法を学びつつ、子どもを観察して年齢に応じて授業展開することの重要性を学びました。授業プランや道具の管理など実践活動における多くのアドバイスもいただきました。CCCの講師たちは平井さんの指摘や活動に刺激を

受け、これまでみられなかった教材開発に励む姿がみられました。

調査報告書は、よりラオスに根ざしたCCCという視点から、プロジェクトや現地事務所の運営に対する東京事務所のあり方などについて具体的な課題が示され、今後のプロジェクト計画を立てる上で重要な提言をいただきました。



平井さんの「色の基本を学ぶ授業」に参加した先生と子どもたち。

東京事務所の動き

2000年6月

- 3日 国際子ども図書館見学(ボランティア有志)
- 6日 郵政省国際ボランティア貯金配分団体決定通知式
- 8日 NGO活動推進センター総会に参加
- 10日 アーユス総会に参加
- 21日 名古屋市瑞穂ヶ丘中学校修学旅行生が事務所を訪問
- 28日 大田区国際交流団体懇談会に参加

2000年7月

- 1日 Let's国際協力まつり2000(東京・飯田橋) 星美学園高校の2年生4人が、ボランティア体験をしました。
- 9日 活動入門セミナー(馬込文化センター)
- 15日 ●沖電気工業「ラオス語絵本をつくってラオスの子どもたちに送ろう！」社員のみなさん約30人が参加。チャンタ

ソンの話の後カフェラオでちょっと休憩。後半は絵本にラオス語の翻訳を貼る作業を体験していただきました。約40冊ができあがり、ラオスへ送られました。みなさんありがとうございました。

- 19日 国際開発NGOの評価研究会に参加

2000年8月

- 4日 キヤノン玉川事業所納涼祭
- 11日 ラオス活動報告(小野崇さん)
- 13日 日曜勉強会「日本の児童館と社会教育」立柳聡さん
ラオス活動報告(平井尚美さん)
- 18日～20日 麻布十番納涼祭り
- 26日 大田区ボランティアセミナーの受講者が事務所を訪問
- 31日 教育支援NGOネットワークに参加

東京事務所から

●通信17号「夏のキャンペーン」に

ご協力ありがとうございました。

[子ども文化センター指定募金]

8月末までに17人の方から23口のご協力をいただきました。ありがとうございました。全国4ヶ所の子ども文化センターでは伝統舞踊や絵画など様々な教室を開いています。今回の指定募金で23の教室を3ヶ月間支援することができます。来年3月ごろには写真入りの報告書をお送りできると思いますので、お楽しみに。

今年度分の指定募金は12月いっぱい受け付けておりますので、引き続きご支援よろしくお願いたします。

[絵はがきセット]

8月末までのご注文は合計85組。42,500円の収入となりました。ありがとうございました。ご注文が集中し、ボランティアの作業が追いつかず大変お待たせしてしまったことをお詫び申し上げます。絵はがきセットは引き続き販売いたしております。なお、恐れ入りますが送料もご協力くださいますよう、お願いいたします。

(1組90円、3組まで160円、5組まで200円)

●絵本2000冊運動、目標まであと1530冊!

運動開始から8月末までにラオスへ発送された絵本は約470冊となりました。ありがとうございました。引き続きご協力をお願いします。

●国際子ども図書館にラオスの絵本を

今年5月に部分開館した東京・上野の国際子ども図書館は、アジアをはじめ世界の絵本や児童文学の収集に取り組んでいます。会では、これまでにラオスで出版を支援してきたラオス語の絵本や児童書を、可能な限り寄贈することにしました。2000年は日本の「子ども読書年」。絵本を通して、日本の子どもたちとラオスの子どもたちが出会えたら素敵です。7/21～9/24には「アジアを知ろうーアジアの絵本と絵日記展」が開かれ、文字絵本1～3巻、夕オカムとつばめ、雨もりなど、9冊のラオスの絵本も展示されました。

EVENT◆イベント◆EVENT◆情報

●ワンワールド・フェスタ北多摩(東京 東村山市/東久留米市)

東村山会場で、やべみつのりさんがラオスと子どもたち、紙芝居を語ります。お近くの方はぜひお運びください。

問合: 実行委員会TEL/FAX: 0424-74-9520(白石方)
[10/4～8 東村山中央公民館]

・「ラオスの子どもたちと紙芝居」展

10/4(水)～8(日)

・おはなしと実演「ラオスの紙芝居」

10/7(土) 14:00～16:00

おはなし: やべみつのりさん

実演: 蛤谷一通さん、蛤谷糸美さん他

[10/27・28 東久留米市役所・市民プラザ]

ワールドバザール、国際交流ディスコパーティーなど。

●国際協力フェスティバル2000

10月7日(土)、8日(日) 東京・日比谷公園

市民への国際協力のアピールを目的に、NGOや政府機関、国際機関など200団体以上が参加する日本最大の国際協カイベント。NGOゾーンでは過去最多の113団体による出展ブースを中心に、エスニック料理屋台、ミニステージ、ワークショップなど多彩なプログラムが行われます。ASPBはラオスの学校図書室の模擬展示(予定)と、エスニック屋台(カボチャのお汁粉・カフェラオ)に参加します。ぜひお越しください。

・ワークショップ「絵本をたのしむ・絵本を送る」

10/7(土) 16:00～17:00 (於: Bゾーンテント)

・料理教室「カボチャのお汁粉」講師: チャンタソン(予定)

10/8(日) 15:00～15:30 (於: Cゾーンテント)

問合: フェスティバルNGO運営委員会03-3294-5370

●OTAふれあいフェスタ

10月21日(土)、22日(日) 東京・大田区平和島一帯水のエリア(平和島競艇場)内、交流の広場で、活動紹介とラオスの味・ラオスグッズの販売を行います。

問合: 大田区地域振興部文化国際課03-5744-1226

★★ラオスの紙芝居NEWS★★

愛知県の協力グループ「ランサン」からの報告です。9月10日(日)午後、愛知県幡豆町の児童館でラオスの紙芝居を実演しました。海が見渡せる小高い丘の上にある児童館で、20名の子どもたちを前に、鳥居と石内が「さかなのおんがえし」ほかを実演。「さかなのおんがえし」は、ワイドに広げて見る場面があるので、臨場感があって受けていましたよ。そのあと、幡豆町よみきかせの会のみなさんの月例会に参加させていただき交流をしました。(鳥居)ランサン: 日本福祉大学の図書館で出会った鳥居さん、大島さん、石内さんの3人組。学園祭など身近なイベントで紙芝居やカフェラオ喫茶店など企画しています。

URL: <http://www11.freeweb.ne.jp/travel/lanxang/>